医事・文談　九百五十九

平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その247
子規と漱石（五十六たび続）

前回、漱石とより江夫人が面識があったことが、「漱石書簡集」から分ると書いた。書簡の発信日が、明治45年4月21日と、大正5年8月18日であるから、少なくも明治45年4月以前から識り合っていたことになる。しかも家庭的な交際もあるらしく思われる。

そこで、ヒョットしたらという気持ちで、漱石夫人・鏡子が口述し、門下生で長女の筆子と結婚した女婿の松岡　譲が筆録した『漱石の思ひ出』を繙いてみた。

果然と云うべきか、そこには夏目家に出入していた、しかもかなり頻繁に親しく訪れていた久保賴江の姿が描写されているのである。

この書は、現在は岩波書店と文芸春秋社（文春文庫）から刊行されているが、元来昭和4年旧改造社から発行されたもので、数十年前に一読したことがある、その時は久保賴江の名も記憶せずに終っていたのである。

余談だが、この書の発行により、鏡子悪妻説が一時流布した。ソクラテスの妻と並び称されるほどの悪妻だとか、自分が良い子になりたいために漱石を気狂い扱いをしたと評されたほどである。

しかし、あまりの乱暴に一時別居をしたり、漱石が離縁状を書いて、実家へ帰るようにしむけたりするので、鏡子夫人の困り方は一方ならぬものだったようである。帝大の呉　秀三精神科教授の診を受けたりしたこともあるというから、かなり精神異常の状を呈したものと思われる。

留学時代、ロンドンでも発狂説が伝えられたことがあるから、鏡子夫人の家庭内での観察ばかりでなく、漱石には異常を思わせる言動があったのであろう。

『漱石の思ひ出』の久保賴江さんについての記述は、次のようで、少々長文であるが、そのまま引用することとする。

「猫」で最初にいただいた原稿料は、しめて十二、三円ぐらいのものだったと覚えております。

そのころ久保賴江さんがよくお見えになりました。まだ結婚されて間のないころで、お年も二十二、三歳ぐらいだったでありましょう。折ふしご主人の猪之吉博士が洋行中なので、医科大学長の大沢博士のご令弟のとこかに同居しておられました。文学好きの、当時のいわば新しい女ともいうべきハイカラな方でした。いつも宅にいらっしゃる時には袴をはいて、よく自転車にのっておいでになりました。たびたびいらっしゃるうちには自然忙しがっている時もあり、また例のとおり機嫌の悪い時もあったりで（注・主人の漱石が忙しかったり、機嫌が悪い時には会えない）、だんだん私とも近しくなられて、いっしょに買い物に出たり、時には子供たちなんかをどっかへ連れて行っていただいて、ずいぶんお世話になったものです。

ある時、訪ねておいでになりはなったが、はなはだ夏目の機嫌が悪い。こそこそ私のところにいらして、自分がたびたびくるので不機嫌なのでしょうかしらと、たいへん心配顔におっしゃるので、私のほうでは久保さんの見た不機嫌くらいにはなれっこのことですから、また例のが出たのですよとすましております。久保さんの方ではそうでしょうかしらと、平常をよくご存じないので半信半疑でいらっしゃいます。そうかと思えば機嫌のいい時などは、私の部屋に久保さんがいらっしゃるのにわざわざ書斎から出てきて冗談口を叩いたりすることもあるのです。

「貴女はなぜいつも袴ばかりはいていらっしゃるのです」

袴が気になるとみえて、こんな質問をしております。すると久保さんも心得たもので、

「帯がないからごまかしておりますの」というお答えなので、夏目も感心して、

「ああ、そうですか。それじゃ帯の代わりですね」といった調子です。

以上、『思ひ出』の二四「猫」の話の一部であるが、以下に少しく注釈を加える。

指定医薬品
ロイコトリエン受容体拮抗剤
気管支喘息治療剤
薬価基準収載
キプレス®錠10　チュアブル錠5
KIPRES® Tablets　KIPRES® Chewable Tablets
一般名：モンテルカストナトリウム〔JAN〕
製造・販売元
杏林製薬株式会社
東京都千代田区神田駿河台2−5
〈資料請求先：杏林製薬学術部〉
※効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご覧ください。